

第 158 回山口西田読書会 (2017 年 12 月 16 日)

第 157 回 (同年 12 月 8 日) のプロトコル

今回はこれまでの復習を行った。したがってテキストとしては『自覚における直観と反省』より「跋」旧全集版第 2 巻 342 頁右から 10 行目「否定の中に肯定を含むことである」まで。復習の内容は以下の通り。

『善の研究』ではさしあたり意識ないしは判断・反省の領域と、それ以前の事実の領域が区別され、この事実の領域が「意識現象」と呼ばれている。この意識現象は宇宙そのものであり、ここにすべてがある。イメージ的には宇宙の誕生から起った出来事のすべてが今ここに存在している。この意識現象の直接の知がさしあたり知的直観であり、純粹経験である。この領域は主客未分であり、言語で言い表すことのできない言語道断の領域である。『善の研究』ではこの領域を明らかにするために意識に上った心理学的な見地を援用する。このことが後に『善の研究』の立場が「心理主義」として自己批判されることになる。科学を基礎づけるべき哲学が科学を抛り所にしてしているからである。

『善の研究』では意識に上った目的観念が *implicit* な全体となって、その発展が目的観念の実現になるという観察から推して、この言語道断の領域も同じ構造 (形式、方式) であろうと推測されている。例えば「水を飲む」という目的を意識した時には、蛇口の所へ行く、コップを手に取る、蛇口をひねる等のことが暗黙に了解されており、その実現が実際に水を飲むという行為になる。今のは意志に関することであるが、同様のことは思惟についても言える。何かを言おうとしたときには言いたいことが先ずぼんやりとした全体となって、それにピッタリとした言葉を与えていくことで、言いたいことがハッキリするといった具合である。目的観念が実現されると、さらに大なる統一を求めて次なる目的観念が設定されることになる。純粹経験の領域においてはこうした運動が無意識に行われる。目的観念もことさらに意識されることなく、直観において捉まれる。

ところがこうした運動がうまくいかなくなる時、反省が生ずる。西田はこの「うまくいかない時」とは「体系の衝突」の時であると考えている。例えばある音がこれまでに聞いたことがない音であれば、この音は何の音であろうか、という問いが起り、それについて考えようとして自分の経験を反省することになる。これが体系の衝突である。また例えばピアノの練習でも始めはすべてを意識しなければ何もできない。これも体系の衝突である。しかし練習していくうちにことさらに意識をしなくてもできるようになる。この時には再び純粹経験の立場に戻る、と西田は考える。

(この立場ではどこまでも統一は大になるが、これで終わりという極限を持たない。しかし極限を持たないということは、どこまでも小なる統一を抱えるということである。この自分の力ではどうにもならないあり方に絶望する時が、最大最深の統一としての大なる生命からの要求が宗教的要求として我々の自己に対して起こる機縁となる。これが「見神の事実」であるが、この事実における見る自己と見られる神とが一つになったところが純粹経験、すなわち独立自全の純活動でありこれが『善の研究』の考究の出立点を成している。)

続く『思索と体験』ではこうした心理主義を克服し、京都に移って出会った新カント派とベルグソンの影響のもとに、内から見る (直観) の立場から外から見る (反省) の立場を説明しようとする。前者がベルグソン、後者がリッケルト (新カント派) の立場である。こうして西田はカテゴリー、思惟の三法則、理性の無限進行を直観の立場から導出しようとする。例えばカテゴリーの内の「一 (Einheit)」を純粹自己の統一 (Einheit) から説明しようとする。この過程で理性の無限進行を自覚の事実にもとづいて説明しようとするに際して、自覚によって直観と反省を統一的に説明できるのではないかという考えを抱くことになる。その際の自覚とはロイスを通じて知ることになったデデキントの無限の定義にヒントを得たものである。ロイスの比喻を用いるならば、英国にいて完全なる英国の地図を描こうとすれば、書き終えた時にはすでに書き終えた自分を書かねばならず、こうして無限に進むというものである。西田はこうした自覚の構造によってあらゆる実在を説明できると考えたのである。こうして『自覚における直観と反省』の執筆が始まる。

しかし直観と反省を統一するものとしての「自覚の事実」それ自体が矛盾を孕んだものと言わざるを得ない。反省としては見る自己と見られる自己はどこまでも異なったものであるが、自覚の事実が成立する以上、そこに自己が自己であるという直観がなければならぬとされる（旧全集第2巻21頁）。こうなると改めてこの直観からどのようにして反省が生ずるのか、さらにこの直観の成立根拠自体が問われることになる。

西田は結局この直観から如何にして反省が生ずるかという最初の問いに対して、「絶対自由意志」による「創造」によって説明しようとする。そうしてそこに「止まれる運動、動ける静止（スコトウス・エリュージェナ）を見ようとする。（同341頁）

直観、すなわち直接経験の世界の光景に直接するのは宗教、さらには芸術であり、哲学のことではないとされる（同341、345頁）。そうして「試みに哲学の立場から論じて見れば、余は之（言語思惟を超越したもの：引用者）を絶対自由意志の世界と考えてみたいと思う」と述べる。ここには宗教および芸術と、哲学の微妙な位置関係が表出している。一方では直観の世界に哲学が届かない、ということの意味しているようにも解釈できるが、他方で哲学はそうした世界に直接することを仕事にするのではなく、それを踏まえつつそれを絶対自由の意志の世界と考えるのが哲学の仕事であると言っているようにも読める。因みに『善の研究』執筆と時期をほぼ等しくすると考えられる『純粹経験に関する断章』の断片34でははっきりと哲学は直ちに宗教であると述べられていた。

以上で西田が直観から如何にして反省が生ずるかに苦心していることが理解せられるが、自己が自己であるという直観の成立根拠については触れられていない。と言うより西田はその直観を少しも疑っていないように見える。確かに我々は通常自分が自分であることを疑わないが、その確信の根拠については大変難しいものがあると言わなければならない。我々が意識ないし反省を一步も出ることができないとするならば、我々は自分が自分であるとは言えない。反省する自分と反省された自分が異なるからである。それでは我々は自己の同一性をどのように考えているのであろうか。

そこで少し思考実験を行ってみた。科学技術が発達して、A君の記憶をすべてロボットに移して、元の身体の記憶をすべて消去するとする。生身の体はこれまで通りで温かいが、自分が誰なのかさっぱり覚えていない。これに対してロボットの方は機械であるのに、自分はこの様な姿だが、人間であり、Aです、と切々に訴えている。思い出話も共有できる。どちらをA君と見做すか。もし生身の体の方をA君と見做すならば、身体を自己と考えているのであり、ロボットの方をA君と見做すならば記憶を自己と考えていることになる。

今のは他者の自己についての思考実験だが、自らの自己についてはどうだろう。身体に関しても記憶に関しても完全なるコピーを作って、元のを完全に消去する、とする。その場合私は生き続けていると言えるのだろうか。それとも死んだと考えるべきであろうか。あるいは眠る前に完全に記憶を消されたとして、目覚めた時の私は以前の私と同じ私と言えるだろうか。

こうした思考実験は我々の自己確信に混乱をもたらす。それでは実際に我々はどのようにして自分が自分であるという確信を得ているのであろうか。突然目が覚めた場合を想定してみる。その場合我々が最初にすることは「ここはどこ？私は誰？」を確認することである。誰と言ってもそれは状況の中での役割である。人間はまず自分を役割によって抑える。役割は言葉によって抑えられている。言葉である以上、役割は交換可能である。役職や、乗客などの役割が交換可能であるのはすぐに理解できるが、親や子供といった交換が考えにくいものも、よくよく考えてみれば交換可能である。しかし人間はそのことに不安を覚える。交換可能な役割の中で、誰しものが「あなたでないとダメ。あなたでよかった」と言ってもらいたいし、自分でもそう思いたい。思いたいということは、人間は交換不可能な自己に関して不安を抱いているということである。しかしそのことが取りも直さず、交換不可能な自分というものをどこかで知っているということでもある。

しかし我々は単に自己をそのつどの役割だけで確認しているわけでもない。我々が目覚めた時に必ず確認するもう一つのことは、記憶の一貫性である。これがないと大変不安になる。人間は様々な世界を貫いた唯一の世界で、様々な役割を貫いた唯一の自己を生きているという確信を求めているのである。しかし求めているということは裏を返せば我々は

そうしたものがないという不安を抱えているということでもある。しかしさらにもう一步考えてみるならば、交換不可能に不安を抱き、唯一の世界を生きる唯一の自己に不安を抱いているということは、その裏を返せば、我々がそうしたあり方としての自分をどこかで知っているということである。

それではそのような自己についての確信を我々はどこで得ているのであろうか。西田によれば直観において、ということになる。『自覚における直観と反省』の「跋」342頁に次の表現がある。

我々は我々の内省的経験に於いて知る如く、我々の意志は其一一が自由なると共に、一大自由意志の中に包摂せられて居る。我々の自己は一瞬一瞬に自由なると共に、全体に於いて自由である。

果して我々は我々の内省的経験においてこのような自由を知っているであろうか。すでに見たように我々が反省的に経験する自己は真実には自己ではない。西田は何故このようなことをやすやすと言ってしまうのであろうか。

ところで『善の研究』には「昨日の意識」と「今日の意識」とが「同一の意識」であることが繰り返し述べられている（第2編第2章第6段落（文庫新版74頁）、第6章、第4編第2章第3段落（文庫新版233-234頁））。読書会ではこれらの箇所を参照した。最後にカントの「目的の王国」とヘーゲルの「概念」について若干の説明が加えられた。

哲学的問い：「昨日の意識」と「今日の意識」が同一である、さらには「一個人の意識」と「他人の意識」が同一である、と言う西田の議論は妥当だろうか。